

趣味の旅行

永代美知代

二人ながら揃つて旅行好きの、温泉道樂な両親を持つた太刀男君は、幼い時分から随分方々の温泉に連れられた。

伊豆や箱根や、伊香保や澁や、東京近くの有名な温泉は云ふまでもない、上州の鉾塚、西長岡、常盤線の湯本など、さうした温泉のわかし風呂にまで、一々連れられた。

産れてやつと三十三日のお宮まゐりが済むか済まぬに連れられたと云ふ北陸第一の名湯、加賀の山中温泉、それから百日が経つて丁度半年間を其處で過したと云ふ九州大分縣の別府温泉などこそ、まだ記憶に残されてないけれど、野州鹽原温泉に連れられた四つの夏から以來、次第に記憶がハッキリして來て

ると、つい二三間彼方にフェアリー、ランドから來たやうな、小人の紳士が佇つて居た。茶色の中折帽に黒いマントを着て、煙草を持つたその手には、指環の寶石がキラキラと光り輝いた。小人のフェアリー！太刀男君は慄え上つて怖がつた。

それから又怖かつたのは山形の高湯温泉に出掛けた時であつた。停車場から車に乗つたが途中から人夫の脊におぶされて、父様と母様は危しい山路を歩いて行つた。昔大饑饉の時、此邊の農民達が穀物の代用に、木の皮と云ふ皮を殘らず剥ぎ取つて食べた爲、立樹が枯れて、一帶の荒野になつたと云ふ焼野ヶ原と云ふのを横りかゝると、日が暮れた。人夫の用意して來た提灯に蠟燭をつけさせたが、父様も母様もともすればおくれ勝ち



鹽原

父様母様を驚かせるほど、何彼をよく覚えて居る、那須野ヶ原を通る時、夜汽車の中の洋燈にとまつてその長い物々しい觸角を動かしてゐた鎌切りとスピンチヨの、青い綺麗な姿など、今でもまぎまぎと眼の前に見えて來る。古市の旅館楓川樓の二階から見ると、川向ふの山蔭から紅蜻蛉が百萬億兆、無數に飛んで來た。何でも其處に蜻蛉のお家があるらしいと、熱い日中母様を引張り廻して探し歩いたこともある。夕方の散歩を兼ねて鹽湯の瀧見に出掛けたいが、しぶきに濡れて冷やりとフランネルの襟を掻き合せて早々飛んで歸つた事もある。修善寺の避暑旅行に、何でも彼でも蜻蛉を捕つてとだゝをこね初めた時、母様から注意されてふと見

になつて、時にはお互の間に二三十間の距離が出來て來た。母様は？父様は？と振り返つて見ても、一向ねつからそれらしい姿を認め得ない。四周はもう小暗くなつて居て、今にも狐の化けて出さうな荒野原を何處まで行つたらすむことか、と思ふと云ひ知らず心細くなつて來て、思はず大きな聲を擧げて泣き叫んだ。「父様、母様、怖いから歸りませう！」併しながら旅行の思ひ出は却つて、さうしたやうな怖い、わびしい旅路により深い興味をともなつた。或時には馬の脊によつて山道を越し、又或時には絲織に俄雨をふせぐなど、旅はわびしく彌次喜

多なほど、面白さも一層である。「此奴今に仕様のない旅行好きになるよ」

父様の豫言通り、太刀男君は年一年、大變な旅行好きになつてしまつた。暑中休暇と冬の休暇と、年に二度は必ず何處かの温泉場に出掛けて行くのが、太刀男君一家の規則であつた。

「父様、今年は何處？」

十日も二十日も、いや一月も二月も前から、太刀男君は楽しみにして訊くのであつた。旅行から歸つて東京の地を踏みかふまなみに、もう次ぎの旅行地を氣にして騒いだ。

「そんなにうるさくすると、今度は置いてけぼりだよ」

太刀男君は何よりも一等此言葉が怖い、父様から一言斯う云はれたが最後、どんなに甚いヤンチャをしてゐても、直ぐにもうよしてしまふ。

「ねえ貴郎、今年はウンとやさしく歌枕をさぐつて寢覺めの床へ出掛けませうか」

母様の發言で、父様も直ぐさま賛成。

「木曾の夏は涼しからう、それに中央線はなか〜を知るのも面白い。」

「ねえ父様、あの人は登山でせう？」

太刀男君は囁いた。丁度自分と斜かひの彼方側に腰掛けて、持つて来たサンドウキツチをばくついてゐるお髯の紳士は、リンネルの旅行服を着込んで草鞋を穿いた。

「左様、富士登山かな」

父様の觀察も同じであつた。

「御覽なさいまあ、あの女學生達も絲縫を着てますよ登山でせうか」

成る程母様の仰有る通り彼方の隅つこに女學生が三四人、頻りと愉快さうに話してゐる。

「此頃は馬鹿に登山が流行るんだよ、如何だい、來年あたりお前も一奮發して見る氣はないか」



景色も好いよ」

太刀男君は無論何處だつて大賛成、飯田町からアゲ松行きの切符を買つて汽車に乗り込んだ。

「ガチヤンポツポ、ガチヤンポツポ、ビー、ビー」さうした汽車遊びの時分から、太刀男君はもう汽車が大好きだ。八月の暑い盛りで、汽車が立てこまうが、烈しい日光がチリチリと射し込まうが、一向

ねつからそんな事は何でもない。窓ぎわに陣取つて一生懸命、刻々に移り行く窓外の景色を眺めて、譚もなく愉快な胸を躍らせた。

香魚の名所の立川から八王寺位までは學校の修學旅行で、ちよい〜來た事もある、しかしながらそれから先きは珍らしいので、愈々以て愉快で堪らな

い。

「何だ、馬鹿に音無しいんだね」

父様から皮肉られる程、騒ぎやの太刀男君は黙つて音無しい。窓外の景色にあきれば、乗合ひの人達を観察して、その服装から言語から職業と行く先きを

「ホ、富士ですか」

「富士でも赤城でもお望み次第サ、ハツ〜」

「左様だ母様、僕も一緒にね、是非！」

「何でせうまあ此兒は、冗戯ぢやない、うつかりお山なんぞへ登つて、何時かの大學生みたいに死んでしまつたら如何するつもりだらう、いけません、いけません」

母様は一も二もなく否定してしまつた。

「ナーニ太刀男も最う十四だよ、中學の二年生だもの些少位手離してみた方が好いかも知れない」

「だつてあなた、山は危険です、大學生だつて間違ひがあるぢやありませんか」

「併しそれはほんの過失だよ、山そのもの、危険に

對する適當な準備と、氣象上の注意さへ行き届いて居たなら、決して滅多な間違ひがあるもんぢやありません」

「でも何だか私は怖ろしくつて嫌ですわ」

そんなこんな押し問答が両親の間に交されてゐる間も、汽車はごん／＼進んで行つた。甲府を過ぎ、韭崎を過ぎ、氣がついて見ると、何時の間に降りたか、お髯の紳士も、女學生の群も見えなかつた。

「矢張り富士登山だ、富士は彼方の御殿場から登るより、此方の吉田口からの方が好いさうだ」

「ねえ父様、其内何時か僕にも登山させて頂戴ね」

母様に聞えないやうに、太刀男君はそつと父様の耳元に囁いた。

「あ、その内にね」

父様の返事が物足りないので、今度は手を執つて強く握つた。

「屹度よ、ねー」

「あ、屹度」

用無しの大刀男君はテラリと見えた湖水を見ようとして、のび上りのび上る。

「如何だ好い景色だらう」

父様から聲を掛けられるまで、太刀男君は夢中で見された。

「冬だどスケーティングが出来るとだけどもね、父様、來年の紀元節には僕もよこして頂戴ね」

「あ、それまでにウンと數寄屋橋のスケーティング場で稽古しとくが好い」

「え、だけども父様、此處の氷は大丈夫破れつこはありますか」

「左様サね、今から十年ばかり前、氷が破れて溺死した話もあつたが、今ではもう設備が整つてゐるから滅多な事はない、大丈夫だ、氷の上でウンと焚火をして暖ま

る。太刀男君は飛び上つて喜んだ、父様はあ、屹度と仰有りながら、太刀男君の手を握りかへされたのである。

「嬉しい、嬉しい、嬉しいいなア」

思はず知らず手を叩くと、母様から嗜められた。

「何ですわね太刀男さん、静かになさい」

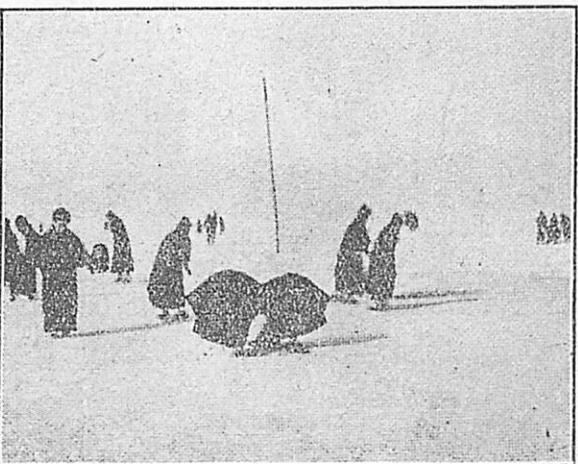
「ハイ、ハイ」
くるりとお膝を廻して、何喰はぬさまに窓外の景色を見ようとしても、生憎にまた山が見える、胸が躍る！

「上諏訪、上諏訪！」
汽車が停ると辨當、壽司、ビール、正宗、煙草など、頻りと物賣りが呼び歩く。

「アラ上等辨當を賣つてますよ」

「此處で買つた方がうまいだらう、オイ辨當や辨當や」

父様母様二人とも其方に氣をとられて居るひまにつた話も聞いた、但し名物の御渡りだけはスケーティングに一番の邪魔物だから注意しなくつちやいけな



湖 訪 諏

「父様、御渡りつて何？」

「一口に云へば湖水の裂目さ、併し昔からの言傳へによると、諏訪

明神を代表する狐の渡つた足跡だと云ふ事になつてゐる、一の御渡

り、二の御渡り、三の御渡り、四の御渡りと都合四條の裂目がある。

其原因は極めて簡單なもので、先づ氷が張ると、寒さが強くなるそ

して段々堅い氷になつて一尺四五寸の厚さになる日中の温さに引き

代へて夜分急に寒くなるので、氷面が收縮するから氷の弱い部分に裂

目が出来、其裂目の空隙には下の水が上つて来て、其場面を占領する、こそれがまた寒い寒氣に觸れて

堅い氷になると云つた順序なんだよ、まるで牛肉の霜降りコースのやうに、新しい氷が鮮やかに奇麗に見えて来る、一體御渡りの出来方は地殻の皺、つまり山脈の成生と同方法に行くもので、湖水の兩岸に出来る川口の開水面から他の開水面へ結びつけて出来る譯になつてゐる」

「そして父様、一番初の氷が張る時にはどんな風になるんでせう？」

「水面に蟬の形のやうなものが出来るさうだ、そして段々堅まるから漁夫などが夜分仕事に出て居て、此蟬形のものを見掛けると早々飛んで歸つて来るさうだ、何しろ諏訪湖は海拔七百五十米の高さにあつて箱根の芦の湖よりも高く、關東一の高山筑波山頂の、ほんの少し下位の高さに、満々たる水を湛へて居ようと云ふのだから、従つて氷結も早い、併し春になつて俄かに氣候がゆるんで来ると、低氣壓を起して風が吹くから、僅かな時間に全部解けてしまふ」

「一體如何して此諏訪湖は出来たものでせうね、矢

張普通の火口湖で、噴火口に水が溜つたものでせうか」

母様が訊いた。

「昔は左様考へられてゐたやうだが、火口湖としては餘り大き過ぎると云ふので、段々研究の結果、諏訪盆地一面に湛へられた湖水だと云ふ事になつてゐる、何でも最初は今よりもずっと大きく、湖の出口は今の天龍川ではなく、釜無川の谿谷から甲府平原へ流れてゐたらしい、それが其後八ヶ岳の噴出物で甲州平原の出口を閉塞されたものだから一時出口のない湖になつてゐて、後にまた一角を破つて流れたのが今の天龍川なんだよ」

「父様、湖つて面白いものね」

「左様ども、併し太刀男は湖沼について多少智識が有るのかい？」

「——いゝえ」

太刀男君は鼻白まざるを得なかつた。

「いかなね、中學校で地文學をやらないのかい」

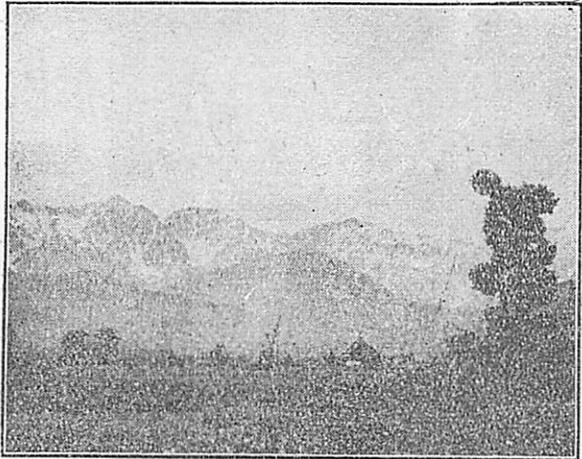
「だつてまだ極々の初歩なんですもの、父様、僕覺えますから説明して下さい」

「本當に教へてやつて下さいな、これから旅行して居て、またごんな湖沼に出會さな

いごも限りません、それなのにその方の智識がなくちや、あつたら猫に小判で、つまりませんわ、ねえ太刀男さん、あなたよく父様のお話を伺つて覺えなくちやいけません」

「え、覺えます、覺えます父様早く」

「まあお待ち、申々長いんだからね、母様、まだ先刻のお茶が残つてたら私に一杯」



Japan Alps

浸蝕湖、堰止湖の三種とし、それを更に細別して向斜谷湖、脊斜谷湖、同斜谷湖、陷落湖、局部地盤の上昇に基く湖、局部地盤の沈降に基く湖、水或は氷河の浸蝕作用に依る湖、火口湖、溶岩流に、山崩れに、氷河に堰き止められた湖、河谷が枝谷をなした水流の沖積物に由つて堰き止められた湖などとする。複成湖は地質構造に基く窪地の堰き止められた湖、浸蝕谷の堰き止められた湖と此二つに分けられて、單成湖に見るやうな浸蝕湖、堰止湖も多い。

「一體湖沼は單成湖と複成湖の二つに分類されてゐる、そして單成湖を又區分して地質構造に基く湖沼

湖もある、海岸の砂山の爲めに堰がれて出来た瀉なご、種類は實に數へ切れぬ程澤山にある。未開の時

代には山なら山、河なら河、湖なら湖と一般的に呼んでゐたのであらうが、一々に調べて見ると地文學上大變に面白い。それに昔の諏訪湖は現今のそれよりもずつと廣大であつた如く、湖沼の形も最初から同じものばかりではない、その最初出来てから普通の平地になり果てるまでには、随分種々雑多の變遷を経るものである、そして幾多の生活と時期とを経なくてはならない。今假りに之れを湖の生命とし、齡として數へて見ると非常に興味深いものがある。

先づ或る場所にある原因から水が堰き止められたと假定する、これが即ち湖の抑々の出来たて、云は、赤ん坊の時代とでも云はうか、それから段々水量が増して面積が大きくなる。漸く湖の形が整ふて堰き止められた水の一部を突き破り、排水口を生じた時代は幼年の頃か。湖に注入して来る沖積物がまだ湖盆の形に變化を與へる程でもなく、特徴ある湖盆の凹凸は現形のまゝに残つてゐて、まだ河成沖積

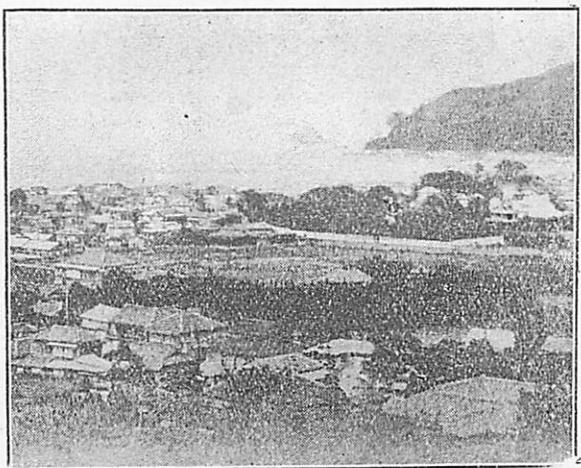
物或は湖成沖積物の爲め、何等の變化を受けてゐない時代は少年時代である、してそれが成年時代になると湖成沖積層が湖を圍繞して湖岸を形成し、注入河から輸送して来た粗大な石礫岩屑の類が、河口で湖中に圓錐形の堆積を拵へ初め、又細粒の河成沈積物が湖底に溜つて、湖の中央部の底の方が漸次平坦になつて来る傾向が現はれる。併しながら湖底は沖積物のために蔽はれることは云へ、極めて薄層なので湖盆の原形は尙ほ歴然として認められてゐる。湖底の大部分が平坦となり、湖岸に三稜洲と絶壁が出来て来る。最早や老年時代と云はなければならぬ。現今の諏訪湖は蓋し此老年期にあるのである。』

「父様、それぢや今に諏訪はなくなつてしまひますか」

太刀男君は周章て、訊いた。

「左様、なくなつてしまふ、併し大丈夫、まだお前がスケーティングをやるまでには、なか／＼なくなり

つこはない。湖底の中央平原が注入河から絶え間なく送つて来る泥土の沈積の爲に段々隆起して、湖岸と殆んど同一の高さに迄達し、湖盆の傾斜が全然なくなつて来る。瀕死時代に入るのだが、斯うなると水中には普通の水草の外に芦だの何だの、左様した水草が生えて来る。それから全くの死滅時代はと云ふと、漸次隆起した湖底に沈水植物が生えて居た其代りに、澤生植物が出来るやうになり、遂には全く深度のない平地となり、多少の人工を加へると立派な田地ともなり、都市ともなる」



湖水を利用して出来た工場の發達によるものだ」

「それでは全體から云つて胎兒、幼年、少年、成年、老年、瀕死、死滅の七期に分つのね」

「左様だ、併し斷つて置くがどの湖沼も皆悉く此

規則通りに行くものだとは限らない、時には一生排水口無しで終る湖もある、胎兒期でゐながら、直ぐ瀕死時代に入るものもあると云つた有様なのは、丁度人間の一生と同じで、決して

豆 伊

「あれは全く明治の初年に出来たものだ、まだやつと五十年そこそこにはかならない新開地だ、諏訪湖縮少の中でも一番新しく出来た村落です、これは澁崎と違つて敢て湖の縮少の結果出来た譯ではないが、近年恐ろしく發展したものに岡谷と云ふ町がある、つまり